

# 2024 年度 GSI 見学会開催報告

草野 有紀<sup>1,2</sup>・中村 佳博<sup>1,3</sup>・梅澤 良介<sup>1</sup>・今泉 博之<sup>4</sup>

## 1. はじめに

産業技術総合研究所(以下、産総研)では2025年4月採用から全ての領域で修士卒研究職員の採用を開始し、人事部主導で学会へリクルートブースを出展するなど、研究職のリクルート活動に積極的に取り組んでいる。その活動の中で参加者から、産総研職員がどのような研究を実施しているのか、産総研における研究テーマ設定はどのように行われるのか、研究環境を知りたい等の声が頻繁に挙げられており、学生等に産総研の研究活動について一層広く知ってもらう機会が必要となっている。学生が接する地質調査総合センター(以下、GSI)の研究者や研究内容は、各研究者が学会発表をしている姿及びその成果、または大学の講義、研究や地質巡検等で検索したデータベースや地質図Navi等の公開コンテンツであり、研究機関としてどのような活動を実施しているのかはあまり伝わっていない。

GSIではこれまでも修士卒の研究職員を継続して採用しており、例年2～3月の採用説明会に合わせて独自の研究現場見学会を実施していた。しかし、COVID-19の世界的な感染流行で中断し、感染流行が沈静化した後はオンラインによる採用説明会と配属予定先の研究者との懇談会のみを再開していた。2024年度はウィズコロナへ社会全体が移行してきたため、研究室見学会を再開することとした。現在GSIが参加しているリクルートイベントを第1表に示

す。いずれも日本語話者を主対象者としており、英語話者には用意した英文資料を基に担当者が随時対応することになっている。

研究室見学会開催にあたり、「インターンシップを始めとする学生のキャリア形成支援に係る取組の推進に当たっての基本的考え方」(文部科学省ほか、2022)に基づいて、GSIでのイベントを「タイプ1」の「オープン・カンパニー形式」で実施することとした。このタイプでは、参加費は全て参加者が支払う。また、就職活動が具体化する前、大学等の夏季休業期間中に開催することとした。

## 2. 研究室見学会

研究室見学会は、2024年8月27日(火)午後開催した。開催を決定した5月末よりGSI及び産総研のウェブサイトに掲載するとともにリクルートサイト、学会や説明会、大学の就職部を通じて広報を行い、7月1日からFormsでの事前登録を行った(第1図)。事前登録先を掲載したチラシには、見学先研究室の研究キーワードを書き添えた。7月20日の締切時点で事前登録者は40名あったが、見学スペースの都合で抽選を行い、31名に対して参加者としての通知を行った。開催日までの1か月間には抽選通知のほか、つくば中央事業所へのアクセスや当日の服装、入館方法などを事前案内として2回送付した。

第1表 現在GSIで実施しているリクルートイベント。

GSIの立場	開催地	イベント
主催者	つくばセンター等	GSI見学会 産総研特別公開 修士卒研究職員オンライン説明会
参画 (主催は学会や大学等)	全国各地	地球科学系の学部主催の業界説明会 地球科学・資源系の各種学会ブースや 学会主催の業界説明会
協力 (主催は学会や大学等で、産総研として参画)	全国各地	各種大型学会ブース 人材開発会社や大学主催の研究交流会 及び業界説明会

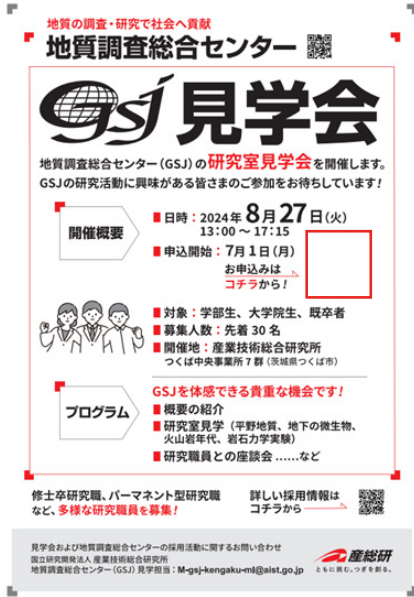
1 産総研 地質調査総合センター研究企画室

2 現所属 産総研 地質調査総合センター活断層・火山研究部門

3 現所属 産総研 地質調査総合センター地質情報研究部門

4 産総研 地質調査総合センター

キーワード：研究室見学会、座談会、リクルート活動



第1図 参加登録開始のチラシ。実際には赤枠部分にQRコードがあり、登録用のFormsに誘導した。



第2図 配布資料一覧。左下から順に、参加者用名札、GSJのリクルートパンフレット、産総研のリクルートチラシ、北海道地質図クリアファイル、帰りのバス時刻表、各グループの見学順を地図に示したもの、研究者見学会の担当者一覧。参加者用名札にはあらかじめ見学時のグループを表示した。

第2表 見学会全体のスケジュールと担当者。

時間	内容	担当者
12:30~13:00	会場受付	梅澤良介 <sup>1</sup> ・中村佳博 <sup>1</sup> ・大川裕之 <sup>1</sup> ・草野有紀 <sup>1</sup>
13:00~13:20	GSJの概要と見学会の説明	今泉博之 <sup>2</sup> ・草野有紀
13:20~13:30	休憩・移動準備	
13:30~15:50	3班に分かれて見学	ラボ説明者：納谷友規 <sup>3</sup> (平野地質)、山崎誠子 <sup>4</sup> (火山岩年代測定)、片山泰樹 <sup>5</sup> (地下の微生物)、北村真奈美 <sup>5</sup> (岩石力学実験) 案内者：中村佳博(A班)、梅澤良介(B班)、石野沙季 <sup>3</sup> (C班)
15:50~16:00	休憩	
16:00~16:10	地質試料調製Gの説明	佐藤卓見 <sup>6</sup> ・平林恵理 <sup>6</sup>
16:10~17:10	座談会と質問対応(採用相談窓口を併設)	座談会対応者：納谷友規、羽田裕貴 <sup>3</sup> 、山崎誠子、矢部 優 <sup>4</sup> 、片山泰樹、金木俊也 <sup>5</sup> 、三好陽子 <sup>7</sup>
17:10~17:15	閉会の挨拶	今泉博之

<sup>1</sup> 研究企画室, <sup>2</sup> 地質調査総合センター, <sup>3</sup> 地質情報研究部門, <sup>4</sup> 活断層・火山研究部門, <sup>5</sup> 地圏資源環境研究部門, <sup>6</sup> 地質試料調製グループ, <sup>7</sup> DEI人事部(見学会当時の所属で示す)

開催日は台風の接近で交通機関に影響が出ることが予想されたこともあり、当日参加者は25名であった。実際に交通機関の遅延があり、見学会への遅刻も複数名あった。全体スケジュールと担当者を第2表に示す。参加者には名札及びGSJの資料をGSJオリジナルグッズのクリアファイル(地質図・北海道)に入れて配布した(第2図)。

最初に会議室でGSJの概要と研究室見学時の経路を説明し、参加者を3つの班に分け、それぞれが合計で4つの研究室を見学した。見学スペースが特に限られる地圏資源環

境研究部門では、約10名のグループをさらに2つの小班に分けて見学を行った。3つの班は、おおまかに学年を揃え、所属機関の地域が混在するようにした。

地質情報研究部門の平野地質研究室は、コア試料庫において、地質図とボーリングコア試料を使った研究について紹介した。活断層・火山研究部門の火山岩年代測定ラボは、年代測定室で試料の選別方法や測定機器と測定方法を紹介した。地圏資源環境研究部門の地下の微生物ラボは、研究内容を紹介してからラボ見学を実施した。また、同部門の





第3図 見学会当日の様子。(a) 平野地質研究室, (b) 火山岩年代測定ラボ, (c) 岩石力学実験ラボ, (d) 地下の微生物ラボの見学の様子。(e) (f) 座談会の様子。

岩石力学実験ラボでは、大型の実験室でその実験内容を紹介した(第3図)。

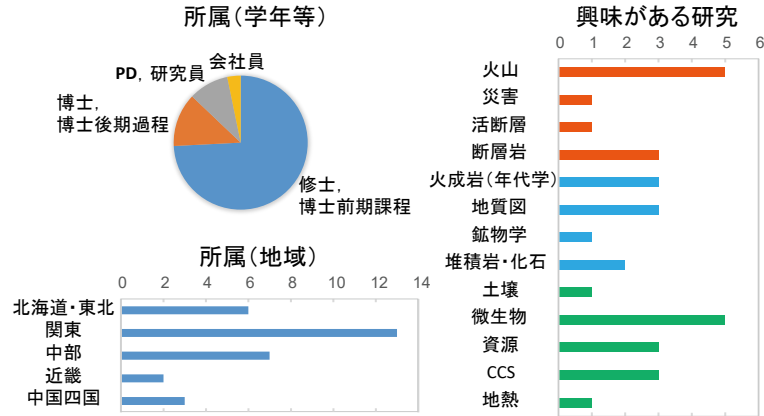
研究室見学後は会議室へ戻り、地質情報基盤センター地質標本館室地質試料調製グループから、薄片試料等の作製について紹介した。その後、研究者との座談会を行った。各研究者に対して4～5名の参加者になるよう椅子を配置し、自由に着席してもらった。約20分ごとに声をかけ、2回席替えをした。採用活動そのものへの質問は人事部の担当者が対応したほか、地質試料調製グループへの質問も受

け付けた。

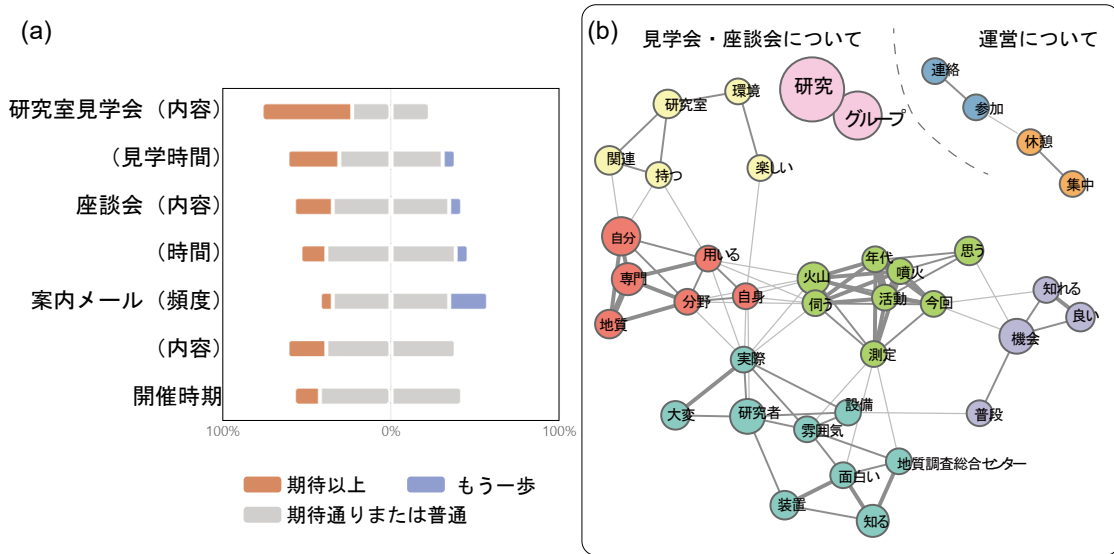
### 3. アンケート集計結果

#### 3.1 申込者の傾向

参加登録時の記載内容を整理し、所属機関の地域と学年、興味のある研究分野を第4図に示した。参加者の約75%は修士・博士前期課程の学生であったが、博士後期課程、ポスドク、既卒者の登録もあった。所属する機関の所在は



第4図 参加登録者の所属地域と分野の傾向.



第5図 当日参加者のアンケート結果. (a)選択式回答の結果. (b)自由記述内容の共起ネットワーク図. 頻出する単語ほど大きい円で表示される。文章内で近接して使われる頻度が高い単語ほど太い線で連結される。単語を結ぶ線がクラスターをまたぐ場合は細い線で示す。

関東地方が最も多く、中部地方、北海道・東北地方と続く。最遠方は中国四国地方であった。興味のある研究分野は、事前登録チラシに記載した関連分野(火山、微生物)の回答が多いものの、GSJの研究テーマに拡がっている。

### 3.2 見学会参加者の感想等

見学会参加者には翌日、参加のお礼と共に Forms アンケートへの記入依頼を送付した。1週間の期間を設け、13回答を得た。アンケート項目は、「1. 見学会についての感想(7項目選択式)」、「2. 改善点(自由記述式)」と「3. 良かった点や感想(自由記述式)」を設定した。無記名で実施したため、3.1に示した申込者の傾向と回答者が一致して

いるかは不明である。

見学会の内容と開催時期については、「期待以上・期待通り」の回答が多く、参加者の目的に沿って提供できたと判断できる(第5図a)。一方、「もう一歩」という回答が多いのは案内メールの頻度であった。次に参加者の着目点について、自由記述の内容から確認する。

「2. 改善点」と「3. 良かった点や感想」の自由記述を一括して約1,400単語としてまとめ、記述内容の傾向を知るために計量テキスト分析を行った。文章の解析にはフリーソフト KH Coder (<https://khcoder.net> 閲覧日: 2024年10月8日)を使用した。解析結果は自由記述欄に頻出した単語と、近接して使用される単語の関係で示し

た(第5図b)。円の色の違いは文章内容のクラスター性を表し、このクラスターに序列はない(樋口, 2014)。自由記述に最もよく出てきたクラスターは、「研究—グループ」であった(第5図b)。この2語は他の記述内容に等しく関与している。その他のクラスターについては左上より、研究室の研究環境(黄)、参加者の専門分野と見学先の比較(赤)、GSJの研究者や施設(青緑)、火山研究(黄緑)、見学会の感想(紫)、見学会運営(青、橙)について述べられていた。火山研究に関して個別のクラスターを示しているのは、アンケートへの回答数が限られる中で専門的な記述があったためであろう。

運営についてのクラスターをつくる「休憩—集中」の実際の記述は、「途中で疲れて集中力が切れてしまいました。休憩時間を長くする対策を」という否定的な回答と「休憩もできて短時間集中で話を聞けた」という肯定的な回答の両方があった。また「1. 見学会についての感想」にあった案内メール頻度について、「参加登録フォーム送信後にも連絡があったほうが、他の活動との兼ね合い上よい」との記述があった。これらは今後の運営の改善点といえる。

見学会の感想(紫)では、「今回は無かった部門(注：原文通り)に興味があった」「知れる機会があったら良かった」「普段行くことがない施設を知る機会となりよかった」などがあった。現場見学機会の提供が好意的に受け止められていることがわかる。研究環境(黄)、GSJの研究者や施設(青緑)については、多くの回答者が「GSJの組織体制や研究所の雰囲気、測定装置、研究者の人柄について知ることができた」「活気な環境だと知ることができ楽しかった」「研究内容や苦労を知ることができ面白かった」との旨を記述していた。火山研究(黄緑)及び参加者の専門分野と見学先の比較(赤)については、「自分の研究に関する専門分野とともに基礎としての地質学が非常に重要であることに気付かされた」「類似した研究テーマを持つ学生どうして研究室を見ることができれば更に自分の研究との関連性を見つけることができるのでは」などの記述があった。見学会や座談会を通じて、参加者が自分の研究テーマを内省する機会となったようである。

#### 4. おわりに

台風10号の接近で開催の可否判断に大変悩んだが、台風の動きが遅かったため無事に開催することができた。研究室見学会を大学等の夏季休業期間中に実施することで、開催側・参加者の双方にとって、研究職公募中の説明会とは異なるリラックスした雰囲気の中で開催が可能となった。

研究者が生き生きと研究現場を紹介している姿はとても印象的だった。終始和やかな雰囲気、参加者からの質問も活発であった。この点は、アンケートの記述からも明らかである。見学会を通じて、研究機関や産業界の中でのGSJの位置付けや、組織の雰囲気、研究者の人柄など、参加者へ伝えなかった点をきちんと伝えることができ、研究室見学会の開催目的は概ね達成できたと考えられる。さらに、アンケートの解析から、見学会の開催が参加者のGSJへのリクルートのみならず、関連する業界や専門分野の中で「学生のキャリア形成支援に係る取組」に寄与する可能性も見出された。

なお、研究職採用を視野に入れた研究室見学会の実施先としては地質標本館を設定しなかった。一方で、各学会及び大学等が主催する業界説明会の参加者には、地質標本館並びに企画展の見学経験者は多数いることから、地質標本館の存在自体も通年でGSJの認知度を高め、リクルート活動の一翼を担っていることがわかる。また、現役大学生の就職活動の姿をよく知る大学の先生方の中には、研究者の芽がある学生へ産総研の修士卒研究職員を勧めてくださっている方もある。何より、学生が研究組織としてのGSJを認識する第一歩はGSJ研究者の学会発表の姿である。引き続き様々な形態を通じて、皆様のリクルート活動へのご協力をお願いしたい。

研究室見学会の開催にあたり、チラシや配布資料をデザインしてくださった都井美穂氏(地質情報基盤センター)、長江敦子氏(地質調査総合センター連携推進室)、研究室への引率、研究紹介及び座談会等に対応してくださった職員の皆様に感謝を申し上げます。

#### 文 献

- 樋口耕一(2014) 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して。ナカニシヤ出版, 250p.
- 文部科学省・厚生労働省・経済産業省(2022) インターンシップを始めとする学生のキャリア形成支援に係る取組の推進に当たっての基本的考え方。 <https://www.meti.go.jp/press/2022/06/20220613002/20220613002-1.pdf> (閲覧日: 2024年10月24日)

KUSANO Yuki, NAKAMURA Yoshihiro, UMEZAWA Ryosuke and IMAIZUMI Hiroyuki (2025) Report on the GSJ Lab tour 2024.

(受付: 2024年11月29日)